

**第9回エコエリアやまがた推進コンクール
優秀賞（エコエリアやまがた推進協議会長賞）**
※掲載している情報は平成26年度時点のものです。

名 称	山形県立農業大学校
所在地	新庄市
<p>1. 取組の背景・経過等</p> <p>(1)環境保全型農業の取り組み開始年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成12年 1学年を対象とした専門科目として「環境保全型農業」(現在は「食料・農業・環境講座」)を開設し、食の安全安心の確保、環境保全型農業等に関する基礎知識の習得を支援している。 ・平成13年 2学年の稲作・果樹・野菜・花き経営学科の専門科目として「環境保全と農業」を設定、実習により環境保全型農業の実践技術の習得に取り組んでいる。 ・平成18年 水稲および野菜の特別栽培農産物認証栽培実習を開始した。 ・平成25年 外部講師によるGAPの特別講義を開始した。 <p>(2)動機</p> <p>消費者の農産物に対する安全・安心志向の高まりや「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律」の施行等に対応し、就農後速やかに環境保全型農業の実践に取り組めるよう、就農準備段階から関連知識と技術を習得する。</p> <p>(3)経営状況(取扱い品目、対象者、対象人数等):平成26年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・有機栽培農産物の生産 米 0.3ha 稲作経営学科2学年 2人 (単年度の取り組みのため認証は受けていない) ・特別栽培農産物の生産 米 0.6ha 稲作経営学科2学年 5人 米 0.4ha 稲作経営学科1学年 11人 ・環境に配慮した農産物生産 果樹・野菜・花き経営学科 62人 ・耕畜連携に関する取り組み 稲作・畜産経営学科 35人 <p>(4)各種認証の取得促進状況等(エコファーマー、特別栽培農産物認証、有機 JAS 認証、GAP 等)</p> <p>平成18年から水稲や野菜の特別栽培農産物認証に取り組んでおり、平成26年度は米(つや姫)で0.2haの特別栽培農産物認証(認証機関:公益財団法人やまがた農業支援センター)に取り組んでいる。</p> <p>2. 取組内容(教育、人材育成の現場における取組内容を記載)</p> <p>(1)実践している栽培技術</p> <p>本校では県内唯一の農業の実践的な教育研修機関として、次の教育目標を掲げ、本県農業を支え、未来を拓き、価値を高め、全国に発信する人材育成に取り組んでいる。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 高度で実践的な農業生産技術や地域資源の付加価値向上に向けた知識や技術の習得と応用力の養成 ② 創造性豊かで国際化や時代の変化に即応できる企業的経営感覚の養成 ③ 将来の山形県農業を担う地域社会のリーダーにふさわしい資質と能力の養成 <p>その中で環境保全型農業については、座学によって基礎を学び、さらに山形県の施策や取組みについて理解したうえで、各作物ごとに実践的な栽培技術に取り組んでいる。また、課題となっている除草技術などは単年度での解決が困難なので、データを蓄積して後輩に課題を引き継ぐなどして取り組んでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・稲作経営学科では、卒業論文プロジェクトで有機質肥料やチェーン除草、カブトエビ、米ぬか・大豆などを活用した除草剤を使用しない除草体系による有機栽培、たい肥や肥効調節型肥料を利用した米の特別栽培に取り組んでいる。 ・果樹経営学科では、卒業論文プロジェクトで機能性袋を利用したブドウの病虫害軽減による化学合 	

成農薬の節減に取り組んでいる。また、木質バイオマスを活用したさくらんぼの加温栽培による地域資源の活用及び温暖化防止に取り組んでいる。

- ・ 野菜経営学科では、卒業論文プロジェクトで柿剪定枝のチップ炭の養液栽培用培地利用による地域資源の活用や化学合成農薬節減のためのダクト送風によるミニトマトの病害予防、アールスメロンの農薬を使用しない栽培に取り組んでいる。また、今年度からチップボイラーを導入した耐候性ハウスにおいてトマトの養液土耕栽培による化学肥料の低減及び地域資源の活用に取り組む。
- ・ 花き経営学科では、卒業論文プロジェクトでリンドウの木酢液を用いた防除法による化学合成農薬の節減に取り組んでいる。
- ・ 稲作経営学科と畜産経営学科では、耕畜連携の取組みとして、稲わら、飼料米、くず米とたい肥の相互補完を実践している。また、畜産経営学科では、農産加工経営学科がジュース加工する際に出る食品残渣の飼料利用にも取り組んでいる。



チェーン除草



堆肥の散布

(2) 地域や関係者との連携や集団・組織的な活動内容

平成23年度から各学科において、環境保全型農業の重要性を踏まえつつ、地域連携・貢献活動として産業振興と食育を主なテーマにプロジェクト活動を行っている。

稲作経営学科では、たい肥等の有効活用をベースに地元小学生を対象としたバケツ稲の田植え、粃摺り、精米・試食までの作業を学生が教える活動、果樹経営学科では地元小学生を対象としてポット植えしたさくらんぼ(佐藤錦)を使って栽培管理を学生が教える活動により、栽培する喜びや食と農業、安全安心な農産物生産についての理解を深める啓発を行っている。

野菜経営学科では、地域の生産者と連携し、地域資源である伝統野菜の種子増殖・生産安定技術の検討などの活動を行っている。

花き経営学科では、地元の保育園の園児を対象に、土づくりの大切さを説明したり、花壇の植え付け作業体験や出前授業を行い、花育活動を行っている。

畜産経営学科では酪農教育ファームとして認証を受け小学生を対象に家畜とのふれあいや環境保全に配慮した畜産経営について理解を深める活動を行っている。

農産加工経営学科では在来作物を活用した加工品開発に取り組んでおり、認知度向上や特産品化への支援を行っている。

また、学科間の連携として、稲作経営学科が栽培した特別栽培農産物(つや姫)を、農産加工経営学科が米粉の加工品を作るなどの6次産業化の取組みを行っている。



バケツ稲の栽培



さくらんぼの受粉作業



花の植え付け作業



牛とのふれあい

(3) 消費者・実需者との関わり

平成16年に農産物販売体験等施設「農大市場」を開設し、学生が校内で生産した農産物や加工品の販売を行っている。販売体験の機会をより増やすために、平成23年度から25年度は「産直まゆの郷」と連携した販売を行うとともに、「新庄味覚まつり」にも出店している。平成26年度の「農大市場」は年5回の開催を予定している。また、首都圏での農産物の販売実習なども行っている。



農産物販売体験等施設「農大市場」



特別栽培農産物の販売(パッケージも学生の手作り)

(4) 組織外の機関・関係者との連携

畜産経営学科では、地域の畜産農家や関係機関と連携し特産農産物であるタラの木の廃駒木やきのご糞菌床等を飼料として活用する技術の検討に取り組んできたほか、平成25年より国土交通省河川事務所と連携し河川堤防の刈草を飼料として活用する取組みを進めている。

(5) 人材育成活動

先進農業者等体験学習、インターンシップ、研修部で実施している新規就農支援研修(実践コース)などで、有機農業や環境保全型農業、耕畜連携を実践している県内先進農業者を訪ね実際に体験するなどにより、環境保全型農業への意識向上を図っている。

3. 成果（教育、人材育成の現場における取組の成果を記載）

(1) 環境に配慮した技術の成果

学生は、就農準備段階である就学期間から環境保全型農業の関連知識と技術を習得するため、就農後速やかに有機農業、特別栽培などに取組むことができている。特に、卒業論文プロジェクトで環境に配慮した技術に取り組んだ学生は、安定した収量、高品質な農産物生産を実現している。

(2) 経営上の効果

環境保全型農業の卒業論文プロジェクトでは、コスト計算を行い、就農現場での導入可能性を検討する。

また、当然ながら環境保全型農業を組み込んだ経営をきちんと実践できるように、専門共通科目の必修科目として「農業と経営管理基礎」、「複式簿記Ⅰ」、自由選択科目として「複式簿記Ⅱ」、「販売管理」の講義を受講し、経営技術を身につけている。

(3) 地域に与えた影響

研修部において、県内農業者を対象とした有機農業や環境保全型農業に関するセミナーを実施している。内容としては、有機農業や環境保全型農業を実践している県外の先進農家による講演や事例紹介で、毎年 100 名程度の参加数となっている。県内農業者の有機農業や環境保全型農業への意識醸成につながっている。

伝統野菜である「畑なす」の種子増殖・生産安定技術の検討などに、地域の生産者と一緒に取り組むことにより、地域の活性化につながっている。また、地元小学生に農作業を教えることにより、小学生の農業への関心や理解が深まっている。食育活動の体験者が農大に入学する事例も出てきている。

(4) 人材育成動の結果

卒業後の就農者は、23年度卒業生が23名、24年度が24名、25年度が29名となっており、そのほとんどが何らかの環境保全型農業を実践している。

卒業年月	就農	農業法人	研修後就農	計
平成26年3月	18	10	1	29
平成25年3月	12	7	5	24
平成24年3月	14	8	1	23

4. その他特記事項

平成26年度に新たな学生寮を建設中であるが、建物は最上地域産材をはじめとした県産木材を使用するとともに、全国で初めてチップボイラーを導入し、地域資源の活用を図ることとしている。

5. 今後の活動方向

今後も、環境保全型農業に関連した取り組みを進めるとともに、これまでの特別栽培農産物認証に加え、有機JAS認証、GAPなどにも取り組んでいきたいと考えている。

また、特別栽培した「つや姫」は農大市場などの産地直売において定番商品となっているが、特別栽培による農産物の品揃えを増やし、将来的には環境保全型農業による農大ブランドを築き上げていきたい。